

草木塔 1

以前、東北を旅して、ある家の庭先に『草木塔』と書いた石碑を見つけた。いろいろ鉢植えを買ってきては、花期が済むと枯らしてしまうことを繰り返して、なんとなく罪悪感があったのですが、この家の主もそうなのかなと、いた

く感銘した。枯らした草木の成仏を願う姿を想像したのです。

その後いろいろ調べて見ると、草木塔（そうもくとう）とは、「草木塔」、「草木供養塔」、「草木供養経」、「山川草木悉皆成仏」などという碑文が刻まれている塔の総称で、国内に 160 基以上の存在が確認されているそうです。建立されている地域の約 9 割は山形県内の、特に置賜地方と呼ばれる地域に集中するようで、独特な石造物文化遺産ということがわかりました。最も古い「草木塔」は、江戸時代中期の安永九年（1780）に山形県米沢市に建立されたものだそうです。現在のところ、江戸時代に建立された草木塔は 34 基が確認されており、その気持ちで新たに建てられるものもあちこちにあるようです。当院にもあってもいいように思いますが、さしあたっては敷地内の草木案内を『草木塔』と称して、櫻園通信集のひとつのシリーズとしてみたい。



① サクラ（桜）

以前から板橋の養育院はちょっとした桜の名所で、春一番に咲く彼岸桜、通路を貫く道の左右に並木をなす染井吉野の老木、大きく聳える菊咲きの桜、花が黄緑色の鬱金桜、老研のまわりの八重桜、大島桜の古木など、花めぐりはこの季節の大きな楽しみでした。10 年ほど前に、板橋の旧養育院敷地の桜の木の数を調べたことがあります。桜木を数えながら線路向こうの敷地まで歩き回りましたが、100 本を超えていました。中学校や大山公園などの旧養育院敷地を含めると、更に多くなるでしょう。新施設の建設などで、その多くは伐採され、近隣住民のお小言も頂いた。せめてもの罪滅ぼしにと、桜材の一部が新施設に使われている。病院設計者のせめてもの気持ちが養育院記念コーナーや外来の内装に使われています。またこの冊子を『櫻園通信』と名づけたのにも、伐採された桜木たちへの、「山川草木悉皆成仏」という思いがあってのことです。そんなこともあって、「養育院渋沢記念コーナー」の窓から、咲き誇る染井吉野が見られるのはうれしいことです。

新施設の建設後、多くの桜をめめた職員は去り、そして若い職員が加わりました。植栽にも、病院玄関の山桜、屋上庭園の小ぶりの豆桜（フジ桜）の新顔が加わりました。渋沢銅像の周りには、染井吉野の老樹が咲き誇っています。通りすがりの 3 歳児が、その足元にいたので、お母さんの許可を得てパチリ…時代は流れてゆきます・・・



② ツルニチニソウ（蔓日日草）

センターの玄関を入ったところの円形花壇の中央はケヤキ（欒）の木で、その根元などに植えられているのが、キョウチクトウ科のツルニチニソウです。もともとヨーロッパの地中海沿岸が原産地ですが、日本には明治時代に観賞用グランドカバーとして導入されました。早春から夏にかけて青色の花を咲かせ、長く楽しませてくれます。繁殖力が強く、今や花壇から逸出して、人家の近くのあちこちに野生化しています。同様のことは南北アメリカやオーストラリアにも起こっているそうです。野生化しているものは葉に斑が無く、白い斑の入るものは園芸種が多いようです。

屋上庭園にはこれよりも花が小ぶりのヒメツルニチニソウが植えられています。花の色も濃い青紫で、かなり雰囲気は異なります。

昔から親しまれてきたニチニソウ（日日草）は、同じキョウチクトウ科ですが、西インド諸島の原産です。花は短命で3～5日しか保ちませんが、盛りの時期には毎日絶え間なく白、紅、赤、ピンクなどの新しい花を咲かせることから、日々草の名前があります。江戸時代中期に観賞用に導入されたようで、主に夏から秋に花壇や鉢植えで楽しむ昔からの草花です。日本では霜の降りる頃に寒さで枯れることが多いので、一年草として扱い、野生化することは無いようです。種々のアルカロイドを含み、ビンクリスチン、ビンブラスチンなどの抗がん剤の原料となっています。初夏、センターの前の家の前に例も年鉢植えで育てられ、花を咲かせています。



③ ジンチョウゲ（沈丁花）

ジンチョウゲ（沈丁花）は常緑低木で、チンチョウゲとも言われ、漢名：瑞香、別名：輪丁花という名前もあります。原産地は中国南部で、日本では室町時代頃にはすでに栽培されていたようです。2月末から3月に花を咲かせ、強い芳香を放つポピュラーな庭木で、センターの庭園にも多数植えられています。つぼみは濃紅色で、開いた花は淡紅色でおしべは黄色、枝の先に20ほどの小さな花が手毬状に固まってつき、花を囲むように葉が放射状につきます。白花のものもあります。葉の形は月桂樹の葉に似ていますが、より軟弱です。日本にある木は、ほとんどが雄株で雌株はほとんどなく、挿し木で増やします。類縁の灌木にミツマタ（三俣）があり、センター近くの民家の庭に咲いています。





草木塔 2

『草木塔』は、山川草木悉皆成仏を願う塔の総称ですが、『櫻園通信』のひとつのシリーズとして、敷地内の草木案内を書こうと思った経過については前号に記しました。

新病院設計の段階で、植栽に関してクライアントの意見を設計者が聴取する機会が持たれました。そのときは、終末期医療に関わる場合もあるから、椿のような首がポロリと落ちる椿はやめようとか、匂いの強いものは避けようとか言う意見はありましたが、みんな植物のことはよく解らず、専門の植木屋さんにお任せという様子だったように思います。

しかし、出来てから幾つかのことに気づきました。屋上庭園にオレンジ色の花が咲くボケが植えてあり、植物名を書いた札に「ボケ」と書いてありました。認知症患者の診療にかかわることが多く、ボケの花盛りも困りますねという話をしていたら、後日、「ボケ」の名札が「木瓜」に書き換えられていました。認知症でなくても読めない人が続出しそうです。



ボケ(木瓜)

完成した庭の、名札をつけた植物を見て驚いた。カタカナ名の植物が多く、人の名前も覚えつらくなる老年期に、全くアウトである。「ラミウム」、「アベリア」、「アガパンサス」、「ガウラ」、「アスチルベ」、「リグラリア」、おまけに和名で呼ばれているものもカタカナで書いてあり、少しは詳しいつもりにも、何がなんだかよく解らない。認知症などの心理療法として行われる「回想法」では、タンポポやスミレ、レンゲを見て、幼い日々を思い起こし・・・そんな配慮は設計者や植木屋さんにはないようです。この号では、春に咲く英語そのままのカタカナ名の植物を集めてみます。



④ ラミウム (蔓踊子草)

センター正面から入ってすぐの所に、地を這う銀白色の斑入りの葉があります。春には踊子草のような形の黄色い花を咲かせますが、「ルミナリア」と書いてあります。

もともとヨーロッパからアジアに分布しているシソ科オドリコソウ属の常緑多年草で、林内の半日陰に生え、高さ10～20センチになります。匍匐枝を多く出して広がります。葉は緑ですが、銀白色やクリーム色の斑入り品種がたくさんあり、葉を楽しむ目的でグランドカバーにも用いられます。春から夏にかけて、ピンクや黄、白色などの花を咲かせます。当院に植えられているのは、黄色の花を咲かせるラミウム・ガリオドブロンという種類です。我が国に自生するオドリコソウ(踊子草)の仲間であり、「蔓踊子草」という和名があります。

現在日本固有の踊子草はたいへん少なくなり、まれにしか見られません。替わりにもともとヨーロッパ原産ですが、明治の中頃日本に帰化したヒメオドリコソウが大いに繁茂しています。町や近郊でどこにでも見られます。野原に普通に見られるホトケノザ(仏の座)とも近縁ですが葉の形が異なります。なお、七草粥にするホトケノザは、コオニタビラコ(小鬼田平子)という黄色い花の咲く別の植物です。





オドリコソウ



ヒメオドリコソウ



ホトケノザ

⑤アベリア (花園衝羽根空木)

入り口のグランドカバーに、斑なしと斑入りの小さい葉が多数みられます (タイトル背景)、春になると白かピンクの小さなロート状の花をつけます。これがアベリアで、和名は「花園衝羽空木」といいます。

本来、アベリアとはツクバネウツギ属のラテン名です。山で見る野生のツクバネウツギは、高さ1-2メートルの灌木で、2センチくらいの釣り鐘型の薄クリーム色の花がペアで咲きます。

一方、街のあちこちに植えられている園芸品種のアベリアは、中国原産の *Abelia chinensis* (タイワンツクバネウツギの母種) と *Abelia uniflora* の交雑といわれています。垣根、街路などに大量に用いられ、いまや町のどこでも見られます。春～秋のかなり長期に渡って、鐘形の1センチ未満の小さい花を多数咲かせます。花の香りは強いようです。関東以西では真夏の酷暑の時期に花をつける在来植物が少ないため、花には多様なハチやチョウが蜜を吸いに集まります。



ハナゾノツクバネウツギ



ツクバネウツギ

⑥アガパンサス (ムラサキクンシラン 紫君子蘭)

梅雨時期を中心として、光沢のある細長い葉の中心から長く伸びる花茎の先端に数十輪の花を放射状に咲かせます。

君子蘭に姿が似て紫色の花を咲かせるという意味の和名でしょうが、縁もゆかりもない別属の植物で、あまり似ているとも思えません。アフリカ原産の植物ですが、今日300種以上の園芸品種があり、開花時期や草丈などのバラティーに富んでいます。梅雨の季節の風物詩になりつつあり、紫陽花人気に迫っているかのようです。



君子蘭



草木塔 3

⑦ヒメイワダレソウ

遠くから見ると、緑のカーペットのようで、初夏の頃白っぽい花が点在し、花の季節にはクローバのように見えます。庭の隙間に沢山植えられており、グランドカバーの基本になっているのがヒメイワダレソウ（姫岩垂草）です。低い背丈で広がるので、芝生のように使用されています。

南アメリカのペルー原産のクマツヅラ科イワダレソウ属の常緑多年草で、園芸的にはリピアとも呼ばれています。日本には昭和初年に渡来しました。成長が早く、茎は地面を這って広がります。7月から9月ごろ、淡いピンク色にオレンジ色の斑紋がある白やピンク、中間色の3~4mmほどの小花が集合し、直径1~1.5cm程度の球状の小さな花をつぎつぎに咲かせます。耐寒性や耐暑性があり、地面に這い這るように茎を出すので、丈夫で育てやすい植物で、グランドカバーに適しています。水田の畔や法面（のりめん）の雑草を抑制するためにも利用されます。おまけに小さな可愛い花も咲かせてくれることで緑化事業にもよく利用されます。不稔（ふねん）性植物で種子によって増殖することはないので株分けで増やすのですが抜いてその辺にポイしたのも勝手に根付くくらいの繁殖力です、「高速絨毯」と言われる所以です。**手間いらず。みるみる増えて、花も咲き、雑草も負かす、姫岩垂草と詠まれるように人気急上昇中のグランドカバーです。**以前は見かけなかったのですが、新しく造園される場所では盛んに植えられているようです。しかし、庭園の他の植物を駆逐して広がるので、注意を喚起する人もいます。

同じクマツヅラ科のランタナ（和名「七変化」）、美しい花を咲かせ丈夫なため、多数植えられ、また一部は野生化して、いまや、中部以南のどこにでも見られる植物になっています。旧病院の玄関にあり、よく蝶が訪れていた花です。しかし、ランタナ属は中南米や南欧原産の約150種の低木または多年草を含む。熱帯・亜熱帯では広く野生化し、オーストラリアや東南アジアではやっかいな雑草として問題になり、世界の侵略的外来種ワースト100に選定されています。ヒメイワダレソウがそんな風になっていくことが危惧されます。

⑧ビヨウヤナギ（美容柳・未央柳）

梅雨のころセンターの入口辺りに、直径5cmほどの5弁の黄色の美しい花を咲かせているのがビヨウヤナギ（美容柳）です。



旧病院玄関のランタナ（七変化）と
ツマグロヒョウモン

オトギリソウ科の半落葉低木ですが、中国原産で、約 300 年前に日本に渡来し、よく栽培されています。キンシバイにも似ていますが、特に雄蕊が長く多数あり、よく目立ちます。先がやや垂れ下がり葉がヤナギに似ているので、ビヨウヤナギと呼ばれますが、ヤナギの仲間ではなく、中国では金糸桃と呼ばれています。ビヨウヤナギに未央柳の字を当てる由来は、白居易の「長恨歌」に**太液の芙蓉未央の柳此にむかいて如何にしてか涙垂れざらむ** と、玄宗皇帝が楊貴妃と過ごした地を訪れて、太液の池の花を楊貴妃の顔に、未央宮殿の柳を楊貴妃の眉に喩えて 未央柳の情景を詠んだ一節があり、美しい花と柳に似た葉を持つ木を、この故事になぞらえて未央柳と呼ぶようになったといわれています。また最近「美容柳」などを当てることも多いようですが、語源は不明で、単に未央を美容と置き換えたもののようです。



⑨ ノシラン・ノシメラン・ヤブラン ・ジャノヒゲ・玉龍

庭園の木陰を中心にグランドカバーとして多数植えられている細長い 30cm ほどの暗緑色の葉が、ノシラン、縦の白い線のあるのがノシメランであり、初夏に白い小さい花が咲きます。ノシラン(熨斗蘭)は関東以西の本州、四国、九州、琉球諸島の海岸近くの林のなかに生える常緑の多年草です。葉は光沢のある深緑色、夏に白い清楚な花を開き、秋には鮮やかなコバルトブルーの実が熟し、3 月ごろまで冬枯れの中で特に目立ちます。葉の形から、ランの名前がついていますが、ユリ科の植物です。名前の由来は、茎も葉も火熨斗(ひのし：昔のアイロン)で伸ばしたように平べったいことからきています。葉に白い線のある園芸品種は、ノシメランと名付けられています。ところどころにこれより葉が少し大きく、青い花が咲くものがあり、これが藪ランです。葉の斑入りのものも、市中に普及しており、駅からセンターに来る間にも植えられています。



ノシラン・ノシメランの花

銅像・養育院本院碑の前の石畳の間に植えられているのがタマリユウ(玉龍)です。ノシランと葉の形が似ているジャノヒゲ(蛇の髭)は、日本各地の林床などに自生する常緑の多年草です。蛇には髭がないはずだからと竜の髭になり、葉が短く苗がてまりのようになるのが玉竜であるということです。しかし、元をたどると、「尉(じょう)の鬚」の意であり、能面で老人の面を「尉(じょう)」といい、この葉の様子をその面の鬚(あごひげ)に見立てたもので、ジョウノヒゲが転訛して、ジャノヒゲになったと考えられます。



玉竜・タマリユウ(玉龍)



斑入りのヤブラン(藪蘭)



櫻園通信 36. 平成 28 年 5 月

東京都健康長寿医療センター
 養育院・渋沢記念コーナー
 連絡先: 老年学情報センター

春、次々と花つけ 『草木塔』間に合わず、と言う風情ですが、幾つかの草木のこと書き
 継ぎます。どこに何が生えているかを記載する便宜上、大雑把な地図を示します。



- A : 養育院記念中央ひろば、銅像、水場の一角
- B : 自主管理歩道東沿い、歩道分離帯
- C : 自主管理歩道線路沿い
- D : 自主管理歩道北沿い
- E : 駐車場周囲
- F : 大山公園 (旧養育院敷地)
- G : 屋上庭園 : 一般公開 (3 階リハビリ外来待合室より一般入園可) リハ訓練用、緩和ケア (一般入園不可)

⑩馬酔木 : アセビ

「スズラン」のような白い花が連なり、次第に長くなり、花期も長い。また、新緑も美しいツツジ科アセビ属の常緑低木です。日本に自生し、万葉集にもいくつも歌われ、古くから愛されてきたが、一首を紹介します。

我が背子に 我が恋ふらくは奥山の

馬酔木の花の 今盛りなり

当院の庭のあちこちに植えられています。別名「あしび」などと言われ、漢字で書くと「馬酔木」です。「馬」が葉を食べると毒に当たり酔っぱらったようになることが名前の由来です。葉、樹皮、茎、花、すなわち全株にグラヤノトキシン、アセボプルプリン、アセポイン、ジテルペン、アンドロメドトキシンなどの毒素成分があり、毒症状は、血圧低下、腹痛、下痢、嘔吐、呼吸麻痺、神経麻痺などです。鹿などの食害の多いところでこの木が食べ残されて増え、鹿の多い奈良にアセビが多い理由とされています。有毒植物であり、近年では、殺虫効果を自然農薬として利用する試みがなされているそうです。

よく似た花を咲かせるものとして、西洋イワナンテンが地図のC領域の南の辺りに植えられています。ドウダンツツジ (満天星) も鈴蘭型の白い花を咲かせますが房にはならず、紅葉が美しい。街などでよく見かけますが、当院では見かけません。



アセビ



西洋イワナンテン



マンサク

⑪ベニバナトキワマンサク : 紅花常盤万作

マンサクは、早春、枯れ木に葉が出る前に、黄色いリボンのような花を咲かせる。日本全土に分布する高木である。古くから庭木と

して愛され、蠟梅、山茱萸とともに早春の先駆けの黄色い花を咲かせる。和名の由来は、春の早い時期にまず咲くからという説と、花が枝に満ちる様子からついたという説があります。

この近縁種で、葉が赤褐色の常盤で、花がピンクのトキワマンサクが、近年造園業者により盛んに植えられています。当センターでも線路際の歩道際C初めて見た10数年前は、ホーと思ったが、今はいささか食傷気味である。



⑫ ツツジ：躑躅

ツツジの類は4月から5月にかけて漏斗型の特徴的な形の花(先端が五裂している合弁花) 枝先につけます。ツツジ属の植物はおおむね常緑若しくは落葉性の、低木から高木で、葉は常緑または落葉性と書かれているように、何でもありの花木です。主にアジアに広く分布しますが、日本の野生種として、ヤマツツジ、ミツバツツジ、レンゲツツジ、モチツツジなどがあります。江戸時代に久留米藩で品種改良が盛んにおこなわれ、小ぶりの花の多くの美しい品種が生まれました。久留米つつじと言われる一群です。また同じころ平戸藩で大きな花を咲かせる品種が開発され、オオムラサキなどの花の大きい種が生まれています。今日園芸業者が多用する結果、ツツジの代表的な品種とみなされるようになってきました。白花、ピンクのはなのもあり、当センターでも多用されています。



ツツジの語源は、「ツツキサキギ(続き咲き木)」の意味や、「ツツリシゲル(綴り茂る)」の意味などの説があります。漢字では躑躅と書きますが、読めてもかけない漢字の代表的なものでいつもパソコンのお世話になっています。「躑躅」は「てきちよく」とも読みます。昔中国で、羊が誤ってシナレンゲツツジの葉を食べると、「足もとがおぼつかなくなり、死んでしまう」ので、「羊躑躅」(ヤンチーチュー) と呼んだ、と言います。また、羊は毒であることを知っているの、シナレンゲツツジを見ると、前に進まなくなるから、とも言います。「躑躅(てきちよく)」には「行っては止まる」「躊躇」という意味がありことから、見る人の足を引き止める美しさから、この漢字が使われたとも言われますが、後から付けた屁理屈のようです。



⑬ シャリンバイ：車輪梅

4-6月に白または淡紅色の5弁の梅のような花(両性花)をつける常緑低木ですが、バラ科の植物です。枝の分岐する様子が(葉の配列の様子とも)車輪のスポークのようで、花が梅に似ることから車輪梅と名付けられています。当センターでもあちこちに植えられ、特に線路際に沢山あります。

東北地方南部以南の日本、韓国、台湾までの海岸近くに自生します。艶のある常緑葉が美しく、乾燥や大気汚染に強く、良く刈り込みに耐えることから、道路脇の分離帯などの植栽や公園樹、庭木として多用されています。10-11月に直径1cm程の球形の黒紫色の実がなります。





草木塔 5

あっという間に梅雨。今年も半年終わりで、草木を見ていると、季節の流れの速さに唖然とするばかりです。敷地の草木案内『草木塔』を書き継ぎます。

⑬スダ椎：スダジイ

渋沢栄一銅像の傍らに、大きく枝分かれしたスダシイの木があります。また、南側の道路沿いに、古いスダジイの木が 15 本くらいあります。大山公園にも 10 本くらいあります。樹齡はいろいろですが、古いものは養育院の板橋本院が作られた大正 12 年頃に植えられたもののようです。板橋本院が昭和 20 年に米軍の空襲で焼けたとき、破壊の傷跡が幹に残したのものもあるようです。古い先輩が言っていました、どの幹の傷がそれなのか判然としません。

スダジイは本州の新潟県以南の日本各地、朝鮮半島にも分布する常緑の高木で、20m 以上の高さになります。タブノキとともに日本の常緑広葉樹林を代表する樹木です。

5月から6月にかけて遠方から見てもすぐにわかるほどの花序を形成し、雄の花には強い栗の花のような香りがあり、虫を引き寄せています。昨年は、むせるような匂いにヘキヘキする時期もありましたが、今年はそれほどでなく、年によって花のつき方が違うようです。近年、公園木や街路樹、法面の緑化などで植栽されることが多くなったようです。用材として利用される他、シイタケの原木としても利用されています。秋には実がなり、あく抜きしなくてもそのままで食べられる貴重なドングリということで、子供の頃食べた記憶があります。しかし、いまどきの子供は興味がないようで、昨春秋、拾われることもなく沢山のドングリが落ちていました。ためしに口にしてみました、あまり美味しいものではありませんでした。



⑭紫陽花：アジサイ

雨空にアジサイの花が映えます。昔は花が空色の鞠のようなホンアジサイ（シーボルトがオタクサンと名づけてヨーロッパに持ち帰った）と、ガクアジサイが殆どで、土の酸度が高いと赤っぽい花が咲くといわれていました。今、新しいセンターの庭で咲いているのは、色の薄い空色の小振りの花が咲く、ガクアジサイです。これまであまり見なかった子アジサイのような雰囲気の新種のように思えます。敷地内には昔からのホンアジサイもあります。現在解体工事中の敷地に、大きな渦アジサイがあったのですが、工事で抜かれ



てしまったようです。カシワバアジサイが円錐形に白い花をつけています。

アジサイは、ヨーロッパやアメリカで盛んに品種改良され、それが逆輸入されて更に品種改良されて、巷では多様な園芸種が見られます。スミダノハナビ、アメリカアジサイ、クレナイなど、沢山の種類が出回っています。プレゼント用に花屋には珍しい品種が出回っていますが、目の飛び出るような値段のものもあるようです。



- ・ホンアジサイ (赤)・アナベル (白、ピンク)
- ・紅・渦紫陽花・ホンアジサイ
- ・スミダノハナビ (一重、八重)



⑮ ヤマボウシ：山法師

ヤマボウシは日本の本州から九州、および朝鮮半島、中国の山地に普通に生える樹木です。梅雨の頃、白い十字架型に花弁のような総包片が4枚開き、青々とした葉とのコントラストが雨に美しく映えます。9月頃には、直径1〜3センチの赤い集合果が熟し、食べられます。果実酒にも適するようです。昔から庭園樹として愛され、多くの俳句にも読まれています。ネットで拾ったが、

・雨誘ふ花の白さよ山法師 今成公江

近縁にアメリカハナミズキがありときどき間違えられます。

数年前の秋、ある女性から電話があり。区役所前の駅の街路にヤマボウシみたいのが咲いている、今秋でしょ、私の頭がおかしくなったのかしら・・・そんなはずはない、狂い咲きだろうかと見に行ったら、確かに山法師。板橋区が街路樹として新たに植えた木がこれで、説明版がついていました。二季咲きの新品種“ブルーミングテトラ”と書いてあります。写真は病院の横断歩道の脇にあるもので、公孫樹の黄葉を背景に、山法師が白い花を付け、おまけに赤い実がなっている。なんとも俳句の季語には使えない珍種山法師です。





櫻園通信 38. 平成 28 年 6 月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

アメリカ雑草学会の、定義では、「雑草とは人類の活動と幸福・繁栄に対して、これに逆らったりこれを妨害したりするすべての植物」。随分人間の身勝手を主張するものだなと思うが、妥当なようにも思えます。庭園は人間が美観と癒しをもとめて作る疑似空間であり、目的を持った造園業者の作品と言えます。この人工の園に、造園業者の目的に逆らって勝手に生えてくるものが、庭園における雑草です。それを除くために整備する・・・ということですが、それは人間の身勝手に、植物に罪はありません、勝手に人間が雑草と名付けているだけで、個々の植物には、個性、その来歴があります。その中で、センター庭園に見られる外来帰化植物のいくつかを取り上げてみたいと思います。

⑩おっ立ち片喰：オッタチカタバミ

道路の片隅にへばりつき、春から秋にかけ黄色の花を咲かせる昔からの雑草である。地下に球根を持ち、さらにその下に大根のような根を下ろす。匍匐茎をよく伸ばし、地表に広がる。このため、繁殖が早く、しかも根が深いので駆除に困る雑草である。意匠化され、片喰紋として汎用されてきたが、生命力の強さが好まれたようです。

ムラサキカタバミ、イモカタバミなど外来帰化種も増えたが、近年カタバミの世界が激変している。旧来の片喰が、茎が地表を這い、葉の色が時に暗紫色なのに対し、オッタチカタバミ地下茎は水平に伸びるものの、そこから地上茎が縦に立つため、この和名がある。葉の緑が鮮やかで、おっ立った分大きくて、鮮やかな黄色の五弁花をつける。北アメリカ原産。日本では 1965 年に京都府で見つかり、現在では、都内も席捲し、当施設でも従来種を凌駕している。そしてほとんどの人は、この変化に気づいていない。



⑪常盤露草：トキワツユクサ

やや湿っている日陰や水辺に生え、大群落を形成します。草丈は 50cm ほどで、初夏に白い花弁の三角形の花を咲かせる、ちょっと雰囲気のある洒落た植物です。

日本には昭和初期に観賞用として持ち込まれた、南アメリカ原産の帰化植物ですが、今や野生化して、あちこちに大群落をつくっています。外来生物法により要注意外来生物に指定されていますが、北アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアにも定着して、コスモポリタン化しているようです。それが当院敷地にも入り込んできたようです。



⑱ 掃溜菊：ハキダメギク

道ばたや庭などによく生えている雑草だが、春から秋の長期間頂部に小さな花を咲かせる。その後、急に葉腋から岐散状に盛んに分枝を繰り返す、各枝の先の小さな頭花は直径 5mm 程度。5 枚前後の先端が 3 中裂する短い白色の舌状花があり、および多数の黄色の筒状花からなるキク科コゴメギク属の一年生植物です。

オオイヌノフグリ、ヘクソカズラと並んで可愛そうな名前の代表ですが、著名な牧野富太郎が世田谷の掃き溜めで発見したのでこの名前を付けたそうです。よく見ると結構可愛い花です。

熱帯アメリカ原産。南アメリカやヨーロッパ、アフリカ、アジア（日本を含む）に移入分布する。日本では明治時代の初期に渡来したといわれ、1920 - 1930 年代に報告され始めた。現在では全国に帰化植物として定着しており、都会地の道端や空き地などに広がっている。



⑲ 犬酸漿：イヌホウズキ

高さ 80cm くらいの路傍に生える雑草。世界の温帯から熱帯にかけて広く分布する。日本でも古くから全土に分布する。ところが近年北米原産のアメリカイヌホウズキ急増している、従来種に比べて葉が薄く、花も実も小さいが、直接比較しないとほとんど区別できない。

黒い実をつけるナスカの植物であり、バカナスの別名がある。近縁種に、キチュガイナス、バカナス主に畑や道端、民家の庭先などに生息する。一般的な家庭の庭にも生え、雑草として家主を悩ます。ワルナスビ



⑳ 蔦葉雲蘭：ツタバウンラン

ヨーロッパの地中海沿岸原産。大正 4 年に観賞用に導入、逸出している。いまや全国の道端・住宅街などの石垣のすき間、小川の岸边などに広がっている。

葉は掌状に浅く 5~9 裂、春~初夏に白~淡青色で暗紫色のすじがあり上唇は 2 裂して直立、下唇の背面には 2 個の黄色いふくらみがあって花口をふさぐ。花冠の後端は距となる、葉の形も花も美しく植物であるが、広がる。

敷石や石垣の隙間を好む一年草もしくは多年草。無毛で、茎は細くて地上を這い、長さ 10~40cm. 所々で不定根を出す。脈は射出。花冠は、長さ 7~9mm、上下 2 に分かれ、雄ずい 4、雌ずい 1。果実（さく果）は径 5~6mm の球形、長絵によって下垂、熟すと裂ける。種子は径 1mm 弱、黒色~褐色で不規則なしわを持つ。





櫻園通信 39. 平成 28 年 7 月
 東京都健康長寿医療センター
 養育院・渋沢記念コーナー
 連絡先: 老年学情報センター
 稲松孝思

養育院大塚本院時代の渋沢栄一

渋沢栄一は、明治維新後の日本の代表的な経済人で、日本型資本主義の父ともいわれます。若いころから社会事業にも熱心であったことが近年大きく再評価され、多数の書籍が出版されています。図-1は、病院敷地にある渋沢栄一の大きな銅像で、昨年板橋区の有形文化財に登録されていますが、渋沢が半世紀以上養育院事業に関わったことを顕彰し、東京市民の寄付で建てられたものです。養育院事業は、渋沢の代表的な社会事業ですが、その養育院の歴史の中で、大塚・巣鴨を拠点としていた明治の後半から大正時代にかけての養育院は日本の医療・福祉体制に大きな役割を果たしています。



● 渋沢栄一の生涯

渋沢栄一の生涯を図2にまとめてみました。生地は埼玉県の深谷で、藍も商う豪農の長男で、今日でも大きな屋敷が残されています。栄一は、若いころ尊王攘夷運動の熱気の中にいましたが、いろいろな事情で徳川慶喜の一橋家に仕官して武士となり、慶喜の將軍任命に伴い、幕臣となりました。身分制度の厳しい江戸時代に、農民が幕臣になるということは大変なことで、大出世と言えるでしょう。さらに、パリで行われる万国博覧会の江戸幕府の將軍の名代として万博に徳川昭武が派遣されますが、ヨーロッパの王室から国賓待遇を受けています。その使節団の会計掛として、渋沢は2年近くヨーロッパ生活を体験します。しかし、その最中に幕府が崩壊したため、帰国しています。静岡で、謹慎中の徳川慶喜に報告に行くのですが、この時、駿府藩中老として徳川家を差配する大久保一翁に出会っています。その出会いが、その後の渋沢の運命を大きく展開させたのです。

渋沢栄一とは？

- ・ 埼玉の豪農、一橋家に仕官、武士・幕臣に
- ・ 1867年、パリ万博使節団の会計庶務担当
 - 静岡の徳川慶喜へパリ帰朝報告、会計報告
 - 大久保一翁に会い→商法会所
- ・ 明治2～6年、明治政府改正掛など(井上馨の懐刀)
- ・ 府知事: 大久保一翁に営繕会議所の運用を託され、養育院事業、ガス事業に関与
- ・ 日本資本主義の父
 - 第一国立銀行、王子製紙など500を超える企業に関与
 - 論語と算盤を標語に経済活動
- ・ 若いころから60以上の社会事業に関与
 - 福祉・医療: 養育院、慈恵会、済生会、赤十字運動、聖路加...
 - 商業教育・女性教育: 一橋大、女学館、日本女子大
 - 国際協力: 対米、対仏
- ・ 70歳以降は、実業界から引退し、各種の社会・公共事業にひろく関係した。



当時、静岡の徳川家は「太政官札」という政府紙幣(不換紙幣)を大量に抱えていました。その処理について、渋沢は民間資本を合本して商法会所を設立し、産業振興に役立てることを提言しました。そして、商法会所の運営を実行し、大きな利益を上げています。その能力を買われてか、明治政府に招かれ、大蔵省に入省。改正掛(維新政府のシンクタンク)を立ち上げて明治維新の様々な経済改革に尽力することになるのです。その中で人脈もでき、第一国立銀行(現在のみずほ銀行)という日本最初の銀行を創り頭取に就任し、成功を収めました。最終的には、約500社を超える会社の設立に関係することになり、日本型資本主義の父と言われました。

● 養育院と白河楽翁・大久保一翁・渋沢栄一

その渋沢が、若い頃から大変熱心に養育院に関わるのです。そのきっかけは当時東京府知事であった大久保一翁に、七分積金の管理と活用を命じられたことにあります。大久保一翁は、幕府の目付海防係(蕃書調所総裁を兼務)だったときに幕閣に提案した、西洋風の幼院・病院設置プランに基づいて、明治になってから養育院、東京府病院を設立しています。後にその養育院の運営を渋沢に託したのです。

時代は過ぎますが、江戸時代の寛政年間に老中松平定信(白河楽翁)は、「七分積金・町会所」の制度を立ち上げ、貧民救済に当たっています。町の地主階級から集金した基金を貧民の生活援助にあてたのです。これは社会福祉事業として、

養育院とは？



- ・ 明治維新後、松平定信の作った七分積金を用いて、臨時的救貧施設(三田、麴町教育所)を運営。
- ・ 大久保一翁府知事の諮問への救貧三策の答申により恒久施設を計画。
- ・ ロシアのアレクセイ大公の来朝を機に、加賀藩上屋敷に臨時収容(明治5年10月15日)
- ・ 上野の護国院に恒久的な救貧施設として養育院を開院(明治6年2月12日)。
- ・ 『論語と算盤』を標榜する経済人・渋沢栄一が半世紀以上にわたってその維持発展に尽力した。

世界的にも極めて早い時期の成功例といわれています。その「七分積金」が、明治維新の際に、幕府から明治政府に渡されました。江戸開城時に任にあった大久保一翁が東征大総督府に、もともと市民を救済するための資金ということで渡したそうです

その後幕府の徳川家は静岡の一大名に移封になり、その立ち上げに大久保一翁や勝海舟が働くことになります。しかし、明治5年に廃藩置県になると、大久保一翁は徳川家達と共に上京を命ぜられます。文部省二等出仕、次いで東京府知事に任ぜられます。その時、貧民救済のために上野の護国院(現東京芸術大学)に恒久的な救貧施設を作りましたが、その仮施設として加賀藩上屋敷跡の長屋に浮浪者を収容しました。その後、大久保府知事は、七分積み金(共有金)の運用、養育院の維持管理を渋沢栄一に託します。このようにして、「論語とそろばん」を標榜する経済人の渋沢が、社会事業としては養育院の維持・運営に力を注ぎ、他の社会事業にも関わるようになるのです。

なお、渋沢は、共有金の多くをガス灯会社の設立にもあてています。当時の東京は夜になると真っ暗ですから、ロンドン・パリのように光り輝く街にしたい、東京に街灯を造ろうという志を立てて、共有金を使用しています。こうして、渋沢は、早い時期から養育院に大変関心を持ち、社会公共事業に幅広く尽くしていきました。養育院事業への関与をきっかけとして、慈恵会(東京府病院が払い下げられた)、済生会、赤十字運動、女子教育の学校設立などの社会事業、教育事業にも携わりました。70歳からは実業界から引退していますが、引退後も各種の社会公共事業には、91歳で死亡するまで関わりつづけました。

●養育院の冬の時代

養育院は、初めは本郷の加賀藩長屋あと(現在の東京大学)を仮施設として浮浪者を収容していますが、明治6年2月に上野(現在の東京芸大)に恒久施設を建てています。この場所が東京美術学校や、上野の博物館、上野公園になると、その後の養育院は、神田、本所、大塚、板橋と転々としています。大塚に本院が建つ前、養育院は厳しい状況におかれました。

当時の経済学者が「貧民のために税金を充てるのは無駄である」と提議したのです。現在でも「生活保護制度は、受給者を怠けさせる」と意見する人がいます。そのような考え方から「養育院に税金を使うな」という意見が、強く出されたのです。それに対し、渋沢は、一生懸命寄付を集めて維持を計ったのですが、税金が絶たれたため、施設は維持が困難になり潰れそうになります。そこで、公営化を求める建議書を出し、養育院運営は東京市が担うこととなり、再び公営化されたのです。

加えて、施設が各所を移転することは、良くないと指摘されました。ヨーロッパには大きな慈善施設があり、大日本帝国にも、それ相応の施設を設置すべきという意見が出され、大塚の養育院本院が建設されたのです。古い地図では、大塚の本院と巣鴨の分院、精神病院の巣鴨病院は、広い意味での巣鴨村一帯に点在していたということになります。明治19年にできた大塚の養育院本院の絵図、写真を示しますが、現在の大塚病院、監察医務院、大塚公園を含む広大な土地に建てられた立派なものです。

“養育院”とは

精神病、ハンセン氏病、児童福祉、高齢者福祉などで専門の施設に発展し、そのことが、日本の医療・福祉の歴史になっている。

本郷(1872~)→
上野(1873~)→
神田(1879~)→
本所(1885~)→
大塚(1896~)→
板橋(1923~2000)

- ・時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開
 - 狂人病室設置(明8)⇒ 癲狂院 ⇒ 巣鴨病院 ⇒ 松沢病院
 - 捨児・迷子の養育(明18) 里親・職親制度、児教育、幼童室 ⇒ 巣鴨分院⇒石神井学園
 - 回春室:ハンセン病(明32) ⇒ 多摩全生園、長島愛生園など
 - 結核病室(明22)⇒ 勝山保養所、安房分院、板橋分院
 - 感化部(明38)⇒ 井の頭学校 ⇒ 萩山実務学校、八街学園
 - 安房臨海保養所・分院(明33): 虚弱児 ⇒ 船形学園、
 - 長浦更正農場(昭17): 障害児 ⇒ 千葉福祉園
 - 看護養成所(明29) ⇒ 板橋看護専門学校

養育院、冬の時代

- ◆経済学者の田口卯吉らが「税金を使って、貧乏で働けない人を養育することは怠け者を作ることになり、税金で養うべきではない」と議論した。
- ◆渋沢栄一は、政治は論語でいう仁に基いて行なうのは当然であると公立で続けることを主張したが、結果的に税の支出が止められ、委任経営。



渋沢院長の公営化を求める建議書

- ◆必死に委任経営で支え、それでも訴え続けて、やっと東京市営になったの



- ・現在の大塚病院、監察医務院、大塚公園

●養育院の大塚本院。巣鴨分院時代

養育院は、この大塚に開院した時代に、日本の医療・福祉史上、大変重要な事業を成し得ました。それまでの養育院は、捨て子や高齢者など、あらゆる状況の困窮者をひとまとめに收容した施設でしたが、それぞれの收容者の必要に応じて、分化されていきました。そして、精神病、ハンセン病、結核、浮浪児の感化教育、高齢者福祉などの専門福祉施設に発展しました。日本の医療・福祉体制の変化を体現してきたわけで、福祉の原点と言える組織なのです。これが、大塚の本院時代の養育院の仕事だったのです。

養育院の機能分化の始まりは、古くは、精神障害の方に対しては狂人病室を設け、これが、上野から移転するときに東京府病院に移管されて癲狂院(てんきょういん)となり、巣鴨病院、それから現在の松沢病院へと発展してゆきました。また、児童の処遇では、捨て子とか家庭に問題のある子のうち元気な子は、大塚本院から巣鴨分院を独立させ、やがて石神井学園へと事業を引き継ぐこととなります。結核の患者に対しては、板橋の分院を設置しました。ハンセン病患者に対しては、回春病室を設置し、多摩全生園へと発展していきました。浮浪少年の扱いも、初めは大塚の本院で処遇していましたが、周囲の患者の悪影響を避けるために巣鴨分院、井の頭学校で対応することになりました。このように、患者のニーズに応じて、より専門的に対応するために、分類処遇を行なっていたのが「大塚・巣鴨時代の養育院」と言えます。

なお、巣鴨地域に真宗東本願寺系の大学がありましたが、養育院の巣鴨分院は、この学校を買い取って作った施設で、明治42年に大塚本院から独立して問題児童の処遇のために独立させた施設です。ある時期、ここが養育院のシンボリックな施設になり、高松宮や皇族の方々が訪問されました。現在は、石神井公園の方に移転し、福祉事業団・石神井学園として運営されています。巣鴨から石神井に移転する際に運んだ2つの石碑が残されていますが、巣鴨分院で育った子供が、成長して石屋職人になって社会人として自立し、その恩義を感じて、寄付したものです。

このように「大塚・巣鴨時代」に養育院は精力的な活動を行っていたのですが、徐々に周囲に民家が建つようになり、町の中で施設を維持することが難しくなってきました。加えて、取り扱う医療・福祉分野の規模も拡大し、施設の敷地も狭くなり、建物も老朽化してきました。そこで、板橋へ移転するべく工事をしていたのですが、その矢先の大正11年、関東大震災が起きて、建物が倒壊。板橋の建設工事を急ぎ、急遽、板橋の大山に移転したのです。

●渋沢栄一を支えた人たち●

◇安達憲忠

「大塚・巣鴨時代」に養育院の活動を担ったひと達について述べます。渋沢は、実業家として多忙なため、実際の組織運営は、安達憲忠と田中太郎らが行ないました。彼らは、渋沢を補佐して社会事業に邁進した人物です。東京市の運営する大塚の養育院本院を舞台に、幹事として実質的な企画・運営を行い、回春病室、安房分院、巣鴨分院、井の頭学校、板橋分院の創設などに尽力しました。渋沢は、時間を割いて、月に1回は必ず養育院に顔を出しました。安達が社会事業を企画し、運営の実務をこなす。一方、渋沢が政治的な仕組みづくりと資金集めをするという、二人三脚で運営したようです。安達がいたから渋沢が活動できたし、渋沢がいたから安達が活躍できたという関係だろうと思います。

安達憲忠は、安政四年に岡山県に生まれました。幼少期に母親を亡く、親戚の天台宗寺院で育ち、仏教を修め、明治期に

養育院・大塚本院

(明治29.3.31.~大正12.9.20.)

- ・ 明治23.養育院は委任経営から東京市の経営へ
- ・ 明治29.本所から大塚への引越し
- ・ 混住から分類処遇 ⇒ 専門施設へ
 - 虚弱児童: 安房分院: 明治33.8.5.
 - 感化生: 感化部: 明治33.7.22. ⇒ 井の頭学校 M38.10.29., 萩山学校
 - ハンセン病: 回春室: 明治.36.4. ⇒ 全生病院
 - 児童: 巣鴨分院: 明治41.4. ⇒ 石神井学園
 - 結核: 板橋分院: 明治3.10. ⇒ 板橋本院
- ・ 大正12.9.1.関東大震災で崩壊



養育院と安達憲忠

渋沢を補佐して社会事業に邁進し、東京市の運営となった大塚の養育院を舞台に、実質的な企画運営を担い、回春病室、井の頭学校、安房分院、巣鴨分院、板橋分院の創設等にかかわり、養育院の発展に尽力。



1919(大正8年)年退職するまで、安達が企画し、渋沢が政治的な仕組み作りと資金集めを行い、安達が運営の実務をこなすと言う二人三脚とも言える形であったようだ。



安達憲忠

- ・ 1857年、岡山県で生まれる。幼時、母と死別
- ・ 遠威の天台宗寺院で育ち、仏教を修める一方、岡山の藩校遠芳館で経学を学ぶ。
- ・ 新聞記者となり、山陽新報、中国日々新聞、福島新聞などの記者を務める傍ら、自由民権運動に携わり、「岡山自由党の四天王の一人」。また、集会条例違反で逮捕された事もある。
- ・ その後上京し、1887(明治20年)、林徽音20歳と結婚。
- ・ 1888年、東京府に奉職する。
- ・ 東京市養育院院長であった渋沢栄一の勧めで、1892年、明治24年、養育院幹事となる。
- ・ 渋沢栄一の補佐役として、養育院運営の実務を担当
- ・ 1919年、スキャンダルで養育院を退職する。
- ・ 報徳会、上宮教会などに関与
- ・ 1930年12月2日死去。享年74。



新聞記者となって、自由民権運動にかり逮捕されるという波乱の人生を歩んでいます。自由民権運動がらみで福島から逃れて上京、漢学の先生の元でアルバイトをし、その娘と結婚しました。結婚して無職では困るため、東京市に奉職しました。実は、彼の妻の林徽音は、日本で最初にヨーロッパ看護学を勉強した方です。「拜志(はいし)よしね」と名乗り、明治二十年に東京慈恵医院看護婦教育所に入り、学生時代に養育院の大塚本院にいた安達と結婚しました。新婚早々、那須セイとイギリスに渡り、日本初の看護婦留学生としてロンドンの看護婦学校で学びました。フローレンス・ナイチンゲールのいた病院です。東京慈恵医院の高木兼寛が、留学をすすめ、若い看護婦2人を海外へ送り出したそうです。そのうちの1人が新婚ホヤホヤだと思っていたかどうかはわかりませんが…。安達は、林徽音が留学中、東京都に勤務していましたが、その折に渋谷から、養育院の管理を引き受けました。林徽音は帰国後東京慈恵医院で看護長兼手術室係などを務めました。安達憲忠は養育院で忙しく、彼女は看護業務で忙しい。親戚の記録によると、夫婦共に多忙で、一緒に過ごせたのは、日曜・祭日のみだったそうです。林徽音は、明治25年、27歳の時に結核で亡くなりました。おそらく、安達憲忠は、彼女のことを思いながら、一生懸命に福祉の仕事に打込んだのでしょう。

◇入沢達吉

また、養育院の発展に貢献した人物に、入沢達吉がいます。東京帝国大学から派遣されて、養育院の医長を兼任していた医師ですが、この人が養育院の医学的な発展に大きな影響を与えました。ここでお年寄りを診断した経験を生かし、大学に戻ってから「老人病学」という老人医療専門書を出版しました。世界的に見ても「老人病学」という言葉を、極めて早い時期に用いた本と評価されています。現在読み返してみても、諸外国の引用が多く見られる、レベルの高い教科書です。彼は、東京帝大のベルツが退職したあとを継いで教授になって、日本の内科学を確立しました。日本医学会の会長なども務めています。医学史、米ぬかエキスが脚気に効くなど、様々な研究成果を残しています。助教授時代、元気がない虚弱な子どもは臨海学校施設で育てたほうがいいのかと指摘し、房総に施設建設を算段したことも、大きな成果です

入沢達吉 1865-1938(慶応1-昭和13)

新潟県生れ。東大で、ベルツに内科学を学び、ドイツに留学したのち、宮内省侍医局勤務。足尾銅山鉱毒事件に委員として参画。
1895年東大助教授。
1897～1902年養育院医長兼任。
安房分院、板橋分院などで、結核対策に尽力。養育院体験を元に『老人病学』出版、老人病学の草分けとなる。
1901年ベルツ退職のあとを受けて帝大教授となり入沢内科を創始。主宰すること24年に及び、日本内科学の確立に貢献。



◇光田謙輔

また、光田健輔という医師がいました。山口のひとで、済生学舎を野口英世とほぼ同じ時期に卒業しています。医師開業試験に合格し、東京帝大病理の山際勝三郎の研究室に入り、養育院に派遣されました。山際勝三郎は、ウサギの耳にタールによる人工癌を発生させることに成功した人物です。光田健輔は養育院にきてから、ハンセン病の勉強を一生懸命し、感染症対策として回春病室という隔離病室を作りました。また、養育院にとって大きな功績は、大学から1年、2年と短期間で派遣されてくる若い研修医師を、光田が指導したことでした。さらに、養育院の「大塚・巣鴨時代」に、日本で極めて早い時期の看護教育の責任者を務めています。彼は、明治41年に多摩全生園の副医長として栄転しています。ハンセン病対策に活躍し、後に文化勲章を受賞、新聞では「東洋のシュナイツァー」と褒めたたえられていました。渋谷が彼を政治的に支援することで、日本におけるハンセン病患者隔離制度が確立しました。ところが戦後になって、ハンセン病の原因菌に対する治療薬が導入され、隔離の必要性が薄れ、彼が引退したあとも、国はその隔離政策を変えることができませんでした。このことがハンセン病患者の国家による差別問題と指摘されました。このため、光田はハンセン病撲滅に力を尽した人物と評価される一方、こうした人権問題の元凶と批判する人もおり、現代において光田を評価するのには複雑な面もあります。

光田健輔 1876-1964(明治9-昭和39)

- ・ 明治9年(1876)山口県(現・防府市)生れ
- ・ 明治28～29年(1896)済生学舎。(野口英世と同時期)
- ・ 医業開業試験に合格
- ・ 明治31年、東京帝大病理撰科(山際勝三郎教授)、
- ・ 東京市養育院派遣(癩患者に接し、癩病に関心をもち、同院内に癩患者専用の〈回春病室〉を設営した。)
- ・ 養育院では入沢達吉に内科臨床医学の手ほどき
- ・ 大学派遣の若手医師指導
- ・ 看護婦陽性の任にあり
- ・ 明治38年養育院医員、明治41年副医長



光田健輔

- ・ ハンセン病対策を渋谷の元で推進:東京銀行クラブで講演
- ・ 明治42年全生病院院長、昭和5年、国立療養所長島愛生園園長
- ・ 光田反応など癩医学の面での業績も多い
- ・ 日本の救らい事業に尽くす
- ・ 昭和9年、日本癩学会会長、
- ・ 昭和26年文化勲章
- ・ 昭和35年、ダミエン ダットン賞
- ・ 昭和39年逝去



養育院の古参医員として、若手医師教育、看護婦教育、安房分院、結核対策など安達憲忠と共に養育院の運営に尽くす

後にハンセン病隔離論者として、一部から批判

●まとめ

まとめますと、渋谷栄一は、安達憲忠、入沢達吉、光田健輔や、後任の田中太郎らとともに、日本の医療・福祉の歴史において大きな功績を残してきました。その養育院事業を大きく発展させた場所が、大塚と巣鴨の一帯でした。鰥寡孤独(カンカコドク)の窮民の混住状態を分類処遇し、今日の日本における専門福祉施設の創設など、日本の医療・福祉体制の原点はこの地にあったのです。

養育院板橋本院建設と 東上線仮側線敷設

櫻園通信 40. 平成 28 年 7 月

東京都健康長寿医療センター

養育院・渋沢記念コーナー

連絡先：老年学情報センター

玉越慶弘

養育院・渋沢記念コーナー維持ボランティア



【創業時代】
養育院の創設は、明治五年に貧窮者を収容保護する施設とし文京区本郷に在った元加賀藩上屋敷の「めくら長屋」（維新政府・文部省管轄）を使用し設立されたのが始まりである。

その後、上野・神田・本所を転々とし、二四年間の創業時代を経緯して、この施設も狭隘となり、年苑増加する貧窮者などの収容が仕切れない状況になった。

【発展時代】
各方面に敷地を探し、明治二九年に本院を小石川区大塚辻町の地（現 大塚病院）を選び移転することになった。

以前の本所長岡町の施設と比べると、敷地が約三、四倍と

拡がり、多大な貢献を社会に与える発展時代であったが、二〇余年の諸社会情勢から新しい運営展開が求められていた。

院長渋沢栄一翁は、大正一年一月二六日に挙行された養育院創立五〇周年記念式典において、次のように述べられている。

「大塚本院は段々狭くなりましたと同時に、其附近が繁華の場所となりましたため、窮民等の収容所としては、適当なると思われなくなってきました。」「建物の腐朽が甚しく、修理にむしろ経費を要する……」「市内の人口増加に伴って、住宅難の声も聞かされる時、広大な面積を市内繁華な地に救済施設を存するのは必ずしも策を得たことではなく、むしろ市民公共のために開放……」などが



新天地への理由であるといわれている。

【養育院本院 板橋へ】
新しく展開する先として、北都島郡板橋町で明治四一・四二年に開設されていた板橋競馬場の跡地と周辺で広大（約二七、〇〇坪）な敷地の取得が見込まれ、移転計画が進められた。板橋分院（現 仲町）は、大正三年一〇月には竣工し、開院式が行われている。

大正一〇年一月より本院敷地の造成工事を開始。大正一年に本院建設の起工式が挙行された。建設工事は、入札の結果、清水組（清水建設）が落札請負（工費八四億円）、大正一二年三月には、遅れている付帯設備工事を除き、建物は完成された。

■ 東上線仮側線

板橋本院建設の状況を記した資料は少ないが、その過程で、東上線より【仮側線】を敷設して、工事現場へ引き込み、建設資材の運搬が行われている。

現代に残る仮側線敷設の記録

①側線敷設認可

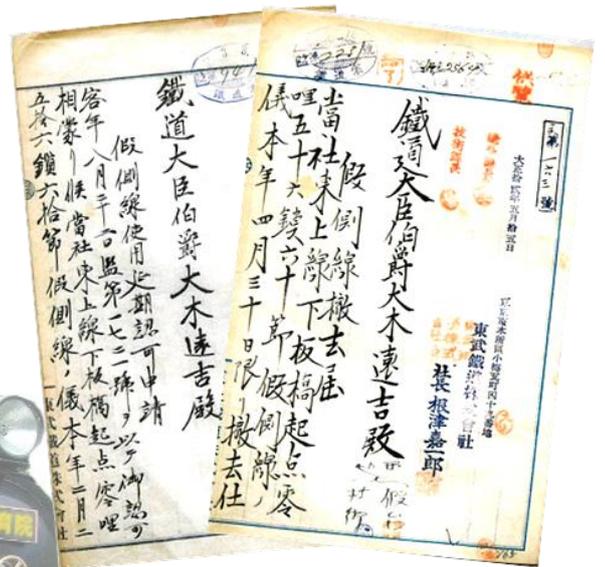
申請：大正 11.8.11 認可：大正 11.8.22
 (板橋本院建設起工 大正 11.7.15)

②仮側線の使用延期

申請：大正 12.3.6 認可：大正 12.3.16

③仮側線の撤去

撤去届：大正 12.5.15 側線撤去：大正 12.4.30
 (大部分完成 大正 12.3)



■ 仮側線の線路はどこに？

仮側線（引き込み線）は敷地の西側を通る東上線の大山駅付近（当時はまだ未設置 駅開設は昭和6年）より、線路の東側沿いにある路地を経て建設用地（現 交番）に達していた。

東京法務局の不動産登記によると、この路地所有が、半分ほど東武鉄道の私有地である。このことから、引き込み線の経路が推測できる。



東京都健康長寿医療センター



東上線を走っていた
B1型蒸気機関車

大正 12 年頃は、東上線はまだ単線運転で、電化されるのは昭和 4 年。当時はまだ畑の広がる長閑な風景。

蒸気機関車（B1 型）が煙を吐きながら走るのは、幻想的な一面でしたでしょう。



参考資料

養育院六十年史 養育院八十年史 養育院百年史
 養育院百年史年表稿 その他 養育院月報